読売 俳壇

高野ムツオ 選

十日の火三月十一日の波　大阪市　今井　文雄

【評】「三月」を省いて、いきなり「十日」から切り出した。実際、空襲も地震もそして津波も皆いきなり襲う。「火」「波」との簡潔な字が簡潔である分、恐ろしさを伝える。

新宿のビルの屋上茄子を蒔く　志木市　谷村　康志

【評】屋上菜園の一場面。高層ビルが乱立する新宿と茄子蒔きとのイメージのギャップが人間の営みの矛盾を突く。諧謔味あふれる。

奴凧風の神住む高みまで　千葉県　笹生　君雄

【評】新聞紙の足をつけて飛ばす奴凧。風の神はどの高さに住むかはわからないが、天空で睨みを利かす奴凧は、もうすでに神の領域の存在。

包丁を使はぬ一日春の星　東京都　奥村　和子

日本兵の眠りし地へと鶴帰る　熊谷市　間中　昭

亡き夫と共に見上げる桜かな　赤磐市　黒岩　博美

それぞれの指に名のあり冬ぬくし　伊勢崎市　大和とき子

冴返る天に動かぬ北斗星　明石市　北前　波塔

椿落ちひそかに水の盛り上がる　久喜市　深沢ふさ江

金平糖舌にまろばす遅日かな　龍ヶ崎市　小宮　光司

正木ゆう子 選

中央線車内高揚冬登山　南房総市　山根　徳一

【評】漢字だけの句は作るだけで精一杯のことが多いのに、状況がちゃんと伝わるように描かれている。混んだ車内で、多くの登山客が今日の登山に意気込んでいるのだろう。

臘梅の楮を折るや馬の鞭　町田市　枝沢　聖文

【評】楮は、枝から真っ直ぐに伸びた細い若枝をいい、鞭のことでもある。臘梅の楮であることが、句を香り高くした。珍しい場面である。

百葉箱訪ふ子にひらくクロッカス　川崎市　井手真知子

【評】百葉箱とクロッカスの取合せだけなら珍しくないが、子供が登場して二つを結びつける中七で、ぐっと面白く。特に「に」が良い働き。

餌台の雪やしばらく誰も来ず　福岡県　松養　花子

かすかなる疼きとともに卒業す　つくば市　小林　浦波

かつて漱石の住む庭梅薫る　熊本県　田上　都

淡雪や人それぞれを美しく　座間市　神山　宏

雪払いミモザの花芽守るよわ　熊谷市　橋本　敏子

リベンジといふ語おぼえし二月かな　大阪市　大塚　俊雄

幹の間に雪で作ったシマエナガ　松戸市　稲葉　豊美

小澤　實 選

窓の猫春の深雪に目を見張る　桐生市　中村　正人

【評】窓から外を見ている猫が、突然の春の大雪に驚いて、目を見張っている。いまだ若い、頭のいい猫であるだろうことが、その反応から明らか。人の反応とも重なる。

初午の揚げ供へあり袋ごと　津市　渡辺　健治

【評】初午の社に油揚が供えてあったが、ビニール袋から出していなかったというのだ。初午でも稲荷の神は油揚にありつけないか。

図書館の返却ポスト沈丁花　葛城市　山本　啓

【評】図書館の返却ポストに借りていた本を投入して、沈丁花の香りに気づいた。その花から読み終えた本の後味のよろしさも感じる。

受験生十キロ肥えてしまひけり　狭山市　小俣　友里

ライバルと共に合格ハイタッチ　大阪市　貝田ひでを

猫の手の子の切る韮ぞざくんざくん　小諸市　藤　雪陽

一歩またいっぽ堅雪進みけり　南砺市　Isamuさん

鉄棒にひとり跨がる卒業期　大津市　星野　暁

土曜しか開かぬパン屋や紫木蓮　新潟市　大竹　健一

大根のごろりと二本勝手口　東京都　石川　昇

津川絵理子 選

手話の子ら楽しげバレンタインの日　神戸市　田上　勝清

【評】手話の内容は分からないが、子らの楽しげな様子を見ていると、こちらまで明るい気分になる。そういえば今日はバレンタインデー。チョコレートを貰った話なのかな？

春来る河馬が大きな口あけて　洲本市　石谷　晴彦

【評】動物園で河馬を見たのだろう。大きな口が豪快に開いた、こんなところにも春を感じたのだ。春という季節の勢いが伝わってくる。

母の編む布の草履や春きざす　新潟県　冬木　陽介

【評】春になると、なぜか何かを作りたくなる。作者の母は布の草履なのだ。家にある布を使って編む草履は、春らしくカラフルだろう。

飼猫にバレンタインの餌届く　宮崎市　長友　聖次

番傘に旅館の名前春浅し　柏市　藤嶋　務

しまく雪睫毛に重し岬馬　新居浜市　寺村　洋子

獅子舞の口の奥より指図あり　東京都　小松　哲夫

綾取りの攣る指宥め良寛忌　東大阪市　梶田　高清

京の寒さまだまだですと宿の人　下関市　粟屋　邦夫

陶片ののこる貝塚下萌ゆる　鹿児島市　林　繁行

題字デザイン・イラスト　福田美蘭

短歌あれこれ　久永草太（歌人）

盗作疑惑発生？

「いい歌を作るためには、たくさんの歌を読みましょう」とよく言う。実際、韻律などは理屈でなく体に刻みこむような側面もある。そういう意味で僕の体に一番刻まれている歌集は俵万智の『オレがマリオ』だろう。なんせ脳がまだピチピチの高校生のうちに何周も読んだから。それがちょいと災いした。

一昨年、僕が歌集を纏めていた最中に、原稿を見て頂いていた俵さんから一通のメールが届いた。僕の〈台風は来るものであり台風は去るものだから　月の明るさ〉の歌について「私の『オレがマリオ』にも〈島人の早店じまい台風は来るものであり去るものだから〉という一首がありまして……」とのこと。

なんてこった。刻み込んだことをすっかり忘れて、脳の奥深くで芽生え直してしまったようだ。そう伝えると俵さんは喜んでくださったけれど、結局その芽は原稿からは間引くことにした。忘れられない芽である。